

花菖蒲の盛夏咲き経験について ～通年開花は可能か？～

鳥取県琴浦町 山脇 信正

【盛夏咲き】

鳥取地方では、花菖蒲が咲き終わるのは通常6月末頃になる。ところが、今年は9月6日まで咲き続けた。これまでも遅れ花として7月に「遅咲き系品種」が数鉢咲くことはあったが今年は例年と異なっていた。咲いた花はすべて「早咲き系品種」であった。

通常花菖蒲の花期は、1ヶ月余りである。わが家では、促成栽培で開花させた前年の12月14日から翌年の9月6日までの266日間絶えることなく次々と花が咲き続けた。今までに経験したことのない珍しい現象である。

情水弘理事長にお聞きしたところ、「今年は異常気象で桜も秋に開花した。もともと休眠の浅い早咲き系品種であったので、その影響も大きかったのだろう。」ということであった。今年の栽培経過を振り返り、その原因を探ることにした。

【方 法】 植え付け時期とその後の手入れ

鉢への植え付けは、促成栽培で12月～3月に開花し終わった鉢の株を3月に入ってから株分けして植え付け、植え付け後の鉢は日当たりの良い屋外で育てた。

肥料は植え付け約1ヶ月後から4月、5月、6月に月1回与えた。

チッ素分が少なくリン酸分の多い「花咲く化成肥料」(東商)を使用。

肥料の成分比(チッ素-4%、リン酸-14%、カリ-5%)1回に茶さじ1杯程度。

消毒は、「トレボン乳剤」(殺虫剤・三井化学k・k)、「オーソサイド」(殺菌剤・サンケイ化学k・k)の1000倍液を4月、5月、6月に月1回散布。

【結 果】 7月以降に開花した品種名と開花日



(若 桜：江戸系 早咲き品種 8月6日)



(霞千鳥：江戸系 早咲き品種 8月6日)



(淡雪桜：肥後系 早咲き品種 8月9日)



(美 園：肥後系 早咲き品種 8月9日)



(火影：江戸系 早咲き品種 8月19日)



(清雅：江戸系 早咲き品種 9月6日)

○7月以降に開花した品種と鉢数

若桜－6鉢、春の灯－4鉢、美園－2鉢、
火影－4鉢、氷河の鳥－2鉢、清雅－4鉢
黒船－2鉢、夏乙女－2鉢、霞千鳥－2鉢、
淡雪桜－2鉢、(10品種30鉢)

淡雪桜以外は、清水弘氏作出の早咲き品種であった。

【まとめ】この度の実験と観察から花菖蒲の生態を知る手がかりがつかめたように思う。

花菖蒲は休眠する植物と言われているが、切り花生産される菊やカーネーションなどと同じように照度と温度の管理をすれば、年間を通して開花する可能性のあること、また、7月から9月まで咲き続けたのはここ12年間研究してきた促成栽培「真冬に咲かせる花菖蒲」と深い関わりがあることが明らかになった。

促成栽培では、9月10日頃に葉刈りをして10月1日以降に室内に取り入れ照度と温度の管理

をすれば、凡そ110日～125日で開花することが判っている。

※日没から午後9時頃までと午前5時頃から夜明けまでの2回、照度300ルクス、室温15℃～22℃に保つ室内環境を電照と加温によりつくる。この室内環境を以下Aの環境という。

通常、鉢植えには花芽に分化した株と未分化の株がある。花芽に分化している株は、Aの環境の中で生育して約110日～125日後に開花する。

一方花芽に分化していない株は、Aの環境のなかで休眠をしないで生育を続けて2月～3月頃までに花芽に分化した株に育ってくる。それらの株を3月に入って植え付けたことになる。植え付け後約110日～125日後の7月中頃～9月にかけて順次開花したものと考えられる。

花芽の分化の時期は9月頃と言われているが、Aの環境が満たされれば四季を通して約110日～125日を周期に花芽の分化が進んでいるものと考えられる。このことから花菖蒲も菊やカーネーションなどと同じように通年開花の可能性が示唆された。

この実験はまだ日が浅いが、先に発表した「花菖蒲の促成栽培」の研究を続けながらその延長として実験と観察を積み上げていくことが必要であろう。

全国の愛好家の仲間と情報を交換しながらその成果を共有していけば、近い将来花菖蒲の花が年中楽しめる日が来るのも夢ではないと思う。



(夏空に映える「若桜」 7月17日)